



TITLE:

# 名前を呼び合うこと : William Golding の The Inheritors における コミュニケーション

AUTHOR(S):

伊村, 大樹

---

CITATION:

伊村, 大樹. 名前を呼び合うこと : William Golding の The Inheritors におけるコミュニケーション. Zephyr 2004, 18: 1-25

ISSUE DATE:

2004-12-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/87606>

RIGHT:

# 名前を呼び合うこと

—— William Golding の *The Inheritors* における  
コミュニケーション ——

伊 村 大 樹

は じ め に

William Golding の長編第二作 *The Inheritors* (『後継者たち』) (1955) の最大の興味は、その独創的なプロットよりも、むしろ実験的な叙述作法にある。よく引かれる例だが、川を挟んで現生人類とあいまえたネアンデルタール人の主人公 Lok は、傍の木に悪臭を発する小枝が瞬時に生えたのに気づく (106)。<sup>1)</sup> この小枝は実は、現生人類の放った毒矢が木の幹に刺さったものである。しかし弓矢はおろか他者への攻撃という概念さえネアンデルタール精神には希薄なため、この出来事は Lok の理解の埒外にあり、我々からすれば珍妙、難解な表現をとる。Golding は、侵略者たる我々の祖先に相対するネアンデルタール人の視点を取ることを選択し、そのことを言語の伝える内容ではなく文体で表現しようとしているのである。そのために、彼らの思考様式をなぞる単純な構造の文を用い、また時にはあってしかるべき説明を大胆に省き、世界は我々の見慣れたものとはずいぶん違って見えてくる。

わざわざこういう難しい (読者にとっても作者にとっても) 方法をとる Golding の狙いの一つは、イノセントな目を通し我々自身の姿を外側から見つめることで、その内に潜む「悪」をより強烈に際立たせようという、一種の異化効果である。争乱も最終段階に近づいた頃、木々に紛れて人間たちを観察する Lok の目に映る彼らの酒宴は、お互いを喰らいあう肉食獣の凶

暴な戯れにしか見えない。

しかし、この小説は単に悪を映す鏡であるだけではない。悪はどこから生じるのか、もしそれが我々の本質と分かち難く結びついているのならば、完全に逃れることはできないにせよ、その本質を知ることによって破滅的な帰結を回避できないのか——こういった問題にも、Golding は一定の洞察を示しているように思える。人間性というコインの両面である破壊性と創造性を、特異な手法で外側から描きつつ、Golding は何を見ようとしたのだろうか。

私の考えでは、彼は言語コミュニケーションにその本質を探ろうとしている。コミュニケーションといってもここでは、あるコード体系を有した送り手の発信した記号を同じコードを共有する受け手が解読した時に記号内容の正しい伝達が達成される、といった固定的なモデルでしばしば表されるもの<sup>2)</sup>ではなく、もっと根源的な、コードの存在という前提自体を問題にするようなものである。Golding はその考察をフィクションの形で提示した。それは基本的にペシミスティックだが、かすかな希望を内在してもいる。その希望を掘り起こし明確に示すことが、本論の課題である。

## 1 言語と picture

人間の言語を相対化し批評するために Golding が用意したのが、“picture” という名の、ネアンデルタール人に独特なコミュニケーション様式である。これは瞑想を通じてあるヴィジョンを集団で共有する、一種のテレパシーと言ってよいものだ。<sup>3)</sup> 記号を媒介とする言語につきまとう、相手の本心をアブリオリには知り得ない、嘘をついているかもしれない、という可能性は排除されており、共同体全体が、一つの意思を持つ一有機体であるかのように機能できる。しかし、テレビのように任意の映像を脳内に映せるわけではない（それなら言葉など全くいらなはずだ）。テキストに示されたその過程を我々現生人類の流儀で分析するならば、これは、ある個体の示す態度や表情、言葉の断片、体臭などが引き金となって、あらかじめ脳内に

貯えられているイメージが、同じ本能を共有している集団に同時に喚起される、といった現象だと思われる。そう考えると picture の成立に必要なのは、伝達される事柄が、ネアンデルタール人の本能の扱い得る範囲から乖離していないこと、言い換えれば、古来彼らが自然と密着して積み重ねてきた生活上起こり得ると予想される、いわば本能にあらかじめプログラムされたイメージと一致することである。よって、破壊的な放埒は存在しない一方で、その想像さえもあらかじめ禁じられている。こうして picture は、言語の持つ問題を回避し得る一方で、ある限界を持つ。

言語へのアンチテーゼとして自他融合的な（ある意味で理想的な）コミュニケーション様式である picture を導入したにせよ、それはネアンデルタール人ならぬ我々人間が憧憬しても仕方がないユートピアだということも、Golding は示している。彼は別に現代人に絶望して懐古趣味にふけているわけではない。この picture は、たとえば黄金時代——いにしえの真に「人間的・有機的」な共同体様式——の想像力による再現、といった胡散臭いものを志向しているわけでは当然なく、あくまで言語批判の道具立てなのである。ではいかなる点で picture は無力なのか。Virginia Tiger が示唆するように<sup>4)</sup> picture が旧知のイメージの組み合わせという形で新たなイメージを提示することがあるかもしれない。しかしその範囲は限られる上に、新たな知恵は言語とは違ってその個体限りのもので、社会的に受け継がれ得ない。<sup>5)</sup> それでは、ネアンデルタール人が経験してきた動物的な生の範囲から大きく逸脱するような事態が生じた場合、picture によるコミュニケーションはどうなるだろうか。今や現生人類という本能の壊れてしまったような存在、環境の淘汰にさらされつつ進化して生きのびていくのではなく、自らに合わせて環境の方を作り変えてしまうような未曾有の生物が登場した。その発するのは“a smell without a picture” (74) であり、自然と乖離した彼らに対する時ネアンデルタール人の picture は混乱し、役に立たないものになってしまうのである。<sup>6)</sup>

そこで、picture から言語へという両形式間の移行とそれに付随して起こ

る現象を通して、言語を操る動物としての我々自身の本質を考察することが、おそらく Golding の狙いの一つであった。ネアンデルタール人は未発達ながら言語も操るが、事態の進行につれその重要性が増してくる。何とか現生人類に対処しようとしているうちに、Lok はある意味で彼らに「学ぶ」のだ——固定したパターンに当てはまらないものには、こちらもそれなりの手段で対処しなければならないのだということを。よってネアンデルタール人は現生人類に似てくる。次の一節は Lok が、現生人類を支配する人間性を、レトリックの一形式として直観する過程を描いている（こういう概念把握の仕方自体、Lok の人間への接近を示している）。

Lok discovered “Like.” He had used likeness all his life without being aware of it. Fungi on a tree were ears, the word was the same but acquired a distinction by circumstances that could never apply to the sensitive things on the side of his head. Now, in a convulsion of the understanding Lok found himself using likeness as a tool as surely as ever he had used a stone to hack at sticks or meat. Likeness could grasp the white-faced hunters with a hand, could put them into the world where they were thinkable and not a random and unrelated irruption. (194)

Lok の意識に密着しつつもあからさまに言語論的なこの一節において、直喩というレトリックの中に Lok が見通すのは、言語記号の恣意性、つまり、色々な語を取っかえ引っかえし、自由に付け加え、また取り去ることによって、無限に新たな意味を生み出せるという性質である。これと不可分の現象として、人間は、picture 的コミュニケーションによって立つパターン化された本能＝自然から離脱することが可能になった。内なる自が外なる他から明確に分離・疎外されるのに伴って自意識が発達し、言葉を自由に操るがごとく自らの外なる環境を自由に操作するようになり、その結果、驚異的な創造性とともに、自然に対する破壊行為を自らの全く外で起こっているものと

見なし恐れを知らぬ暴力性が生み出された。

作品全体を通して、言語と picture との対照における Golding の力点は明らかに、言語の創造性という肯定的な面よりも、記号コミュニケーションが必然的に伴う個の疎外に置かれている。<sup>7)</sup> 記号を媒介とする以上、環境からの分離とともに個体間の分離も避けられない。物語が進むにつれ、Lok たちのもともと属していた統一体の解体が進み、彼らは picture よりも言語に頼らざるを得なくなるが、同時に仲間とのコミュニケーション不全を経験するようになる。おそらく第8章の終わりで、捕われの身となっていた Liku は殺される（呪術的熱狂のうちに食われてしまったのかもしれない）。<sup>8)</sup> 樹上から観察していた Lok の仲間 Fa はそれを目撃していたのだろうが、眠ってしまっていた Lok は知らない。ここに情報量の差が生じるが、かつては picture により意識の共有さえしていた二人が、その差を（十全な言語なら埋められるのだろうが）埋められない。Lok はただ Fa の “strangere moteness” (177) を前になすすべもない。もはや picture の出る幕はなく、一方彼らの未発達な言語能力にもまだ、そのような事態に十分対処できるほどの自由性はない。

主人公たちのコミュニケーション様式の変化は、成長と見るにしても苦い成長、イノセンスの喪失であり、大いなる成長をあらかじめ遂げた者という災厄を前にして遅すぎた徒労に終わるよう運命づけられている。<sup>9)</sup> 窮鼠も噛む相手が虎ではどうしようもない。こうして、それ自体では理想的だった picture コミュニケーションが、言語の破壊性と創造力（記号の自由さの両面）に直面した時の無力さが露わにされる。もちろんこの、picture という夢が人間世界では無効だと明らかにすることは、人間の創造性の勝利を寿ぐものではなく、抑制を欠き暴走の危険を常にはらんだ言語生物であり続けるしかない我々への、Golding の警告である。敵に破滅をもたらす支配を得た「後継者たち」人間の邪悪さと相互不信もまた、テキスト全体に織り成されているのだから。

我々人間は picture を持たず、ただ言語しかない。これが出発点である。

ではどういう希望があり得るのか、というのが次の問題である。

## 2 Liku と Tanakil

ネアンデルタール人的交感能力を持たず自然と乖離した我々現生人類は、卓越した創造性を得たのと引き換えに、決して本質的な相互理解には達し得ず、外界に、またお互いに対する猜疑心と疑心暗鬼、時に暴発する暴力性のうちに暮らすしかない、悲しい生き物なのであろうか。ネアンデルタール人の滅亡を描いて Golding は、我々がそのことに自覚を持たなければならないと訴えたかったのであろうか。

大筋ではその通りだと思える。自他を截然と区別し、他者に限らない攻撃性を向けて平然としていられる人類の性質を「悪」と呼ぶならば、間違いなくそれこそ第二次世界大戦の体験を契機として小説家になった Golding の中心テーマであり、そのことをつい忘れがちな我々に彼が警告を発していることは間違いない。これは数多のユダヤ人がガス室に斃れ、二発の原子爆弾が二つの都市を壊滅させてから十年後に出版された小説である。

しかし単にお先真っ暗というわけではない。そもそも小説というものの自体が、語りを介した作者と読者のコミュニケーションの一様式である以上、言語コミュニケーションの不可能性に絶望しながら小説を長々書き連ねるというのも矛盾している。そして確かに *The Inheritors* には、その方面で希望を抱かせてくれるような場面が存在しているのである。この場面こそが、このエッセイの中心的関心である。

詳しく見ていこう。第八章で、現生人類はネアンデルタール人の少女 Liku ともう一人の赤ん坊を誘拐し捕虜にする。おおむね彼女らはペット扱いされている。しかし、潜入した Lok と Fa が樹上に隠れて見守る中、Liku がキノコのかけらを Tanakil に差し出し、前者の意図通り後者がそれを食べる (153)。現生人類たちはネアンデルタール人を「森の悪魔」(forest devil) と呼んで忌み嫌っていることが後に明らかになるが、これは

対象のそのようなステレオタイプ化を超えた、個と個の間のコミュニケーションの小さな成立であり、その更なる発展の基盤となる。

さらに、言語コミュニケーションの前段階として、Tanakil が Liku の持っている人形について何事か（おそらくは）質問し、もちろん Liku は（読者も）その内容を理解できないが、次には Liku が人形を自分の肩に乗せる姿に二人して笑い声を上げる。無意味な行動に笑うというのは相当に人間的な行動である。ここではお互いがお互いを、知性を備えた、言語の通じる存在とみなすという前提が確立しつつある。それにしても、ネアンデルタール人の笑いという行動の見た目とその表す感情が現生人類のものと偶然一致していたのは、二人にとって僥倖であった——ただし、もちろんこの幸運を用意していたのは作者 Golding であり、その意味では必然であったと言えるのだが。

それからついに、言語コミュニケーションが成就をみる。

Liku was talking to the thin girl. They were pointing at each other.

“Liku!”

The thin girl laughed all over her face. She clapped her hands.

“Liku! Liku!”

She pointed to her own chest.

“Tanakil.”

Liku regarded her solemnly.

“Liku.”

The thin girl was shaking her head and Liku was shaking her head.

“Tanakil.”

Liku spoke very carefully.

“Tanakil.”



The thin girl leaped to her feet, shouted and clapped and laughed. One of the crumpled women came and stood looking down at Liku. Tanakil jabbered at her, pointed, nodding, then stopped and spoke to Liku carefully.

“Tanakil.”

Liku screwed up her face.

“Tanakil.”

They all three laughed. (156–57)

ここでは確実に起こっているのは、お互いがお互いの名前を呼び合い、自らの発した音声がお互いを指すのだということを了解するという出来事である。単に持ち主の発した音声を再生できる新しい玩具を手に入れて喜んでいるのではないことは、ここでの二人の様子と、そしてまた、テキストの終わり近くでの、舟の中の Tanakil の様子からわかる。彼女は譫妄状態に陥っているが、そんな彼女のうわごとこそが“Liku!”なのである (228, 232)。Liku を人間とみなす視座を獲得した彼女のみが、自らの部族が Liku に対して為した行為を、人間性の許されざる冒瀆だと認識していることの表れであろう。

上の引用がどうして小説内で特に重要なシーンなのかというと、それは、これがいわば究極の異文化コミュニケーションだからである。なにせ生物学的な種からして違うもの同士の対話なのに、話が通じてしまっているのである。

この瞬間が特異なのは、この小説に描かれる他のコミュニケーションがごとく不調だということを考えてみてもわかる。ネアンデルタール人の picture は過誤なく情報を共有できる点で理想的かもしれないが、先に述べたように、その性質上、真に新しい情報の伝達は不可能である。その一方で、彼らの言語コミュニケーションは不完全なものに過ぎない。また、現生人類たちの言語コミュニケーションは表面上うまく機能しているように見えるが、彼らはお互いがお互いから孤立した存在であり、最終章で Tuami が部族の

長を殺そうと考えていることに表されているように、彼らはお互い同士を、本当の意味でのコミュニケーションの対象、つまり言葉のやり取りの持つ力でその考えの根本さえも変えられる相手と見てはいない。自分の思い通りに動けばそれでよし、そうでなければ殺すまで——ここでは言葉が一種の機能不全を起こしている。

人間の少女とネアンデルタール人の少女が、種の壁を越え、お互いに名前を呼び合う——Liku と Tanakil はここで、それぞれが属する、ネアンデルタール人の言語共同体と現生人類の言語共同体をともに離脱し、いわば第三の言語空間で出会っている。両共同体はお互いに対して閉じているために、その「あいだ」に意味の確定性が（幻想としてであっても）存在し得ないことは明白であるが、二人はそこへと踏み出した。言ってみればこれは新たな言語、ネアンデルタール人と現生人類が初めて共有した（二語からなる語彙を備えた）言語の誕生の場面なのである。すると、正確には Liku と Tanakil は、お互いの名前を「呼び合った」のではない。これはそれ自体が新しい言語を生み出すような行為なのであり、彼女たちはだから、お互いを新たに「名付けあった」のである。それらは彼女らがもともと属していた旧言語体系における名前と音声的に一致しているが、にもかかわらず彼女らは、いずれもそれまでの言語共同体を離れた場でその語を使うことにより、新しい言語体系の中の新しい名前を獲得したと言えるのである。

彼女らがそれぞれの属する閉じた言語共同体から一步踏み出せたのは、それぞれがまだ子供で（さらに、特に Tanakil について重要なことだが、女性——現生人類の父権の共同体では周縁に追いやられた存在——である）類型的思考をまだ身につけておらず対象をありのままに見る見方を保持していたからだろう。Tanakil に呼ばれてやって来る大人の女は、一見コミュニケーションに参加しているようでいて、この決定的体験になるはずの出来事が何の態度変更にも繋がらない。彼女は単に Liku をペットのオウム扱いしているに過ぎない。それに対して、この子供たちのようなやり方で相手に呼びかけることには、相手をコミュニケーションの通じる相手として認めると

いう態度が前提にあり、いわば相手を本当の意味で人間扱いしている。それぞれの共同体言語という座標軸を一切欠いた新たな言語空間に、一瞬といえども浮遊しつつ互いに向き合う二人は、相手との相対的な関係性の中にのみ自らの存在を知るといふ、いわばマルティン・ブーバーの「我と汝」的関わり（「我とそれ」関係に対立するものとしての）を成立せしめているように思える。<sup>10)</sup> それゆえに、のちに Liku が殺された後 Tanakil は発狂するのである。

ところで、我々の日常生活の中にも、根元的には、Liku と Tanakil のコミュニケーションにおいて露わになっているものに似た断層が潜んでいるとは言えないだろうか。我々は同じホモ・サピエンスという種に属しているが、お互いの内心など知りもしないし、もっと言えば、他人の内面が存在すると確実に言えるのかということさえ、長い間の哲学論争を生んできたわけである。その中でも我々はどうにか言葉をやり取りし、日々を暮らしている。ウィトゲンシュタインが『哲学探究』で言うように、言葉の確定的・超越的な意味を根拠付けるものはどこに探しても結局見出せず、ただ実際の使用のみが後から意味を決める——言葉を発しつつどうにか日々を暮らせているために、逆に、言葉にあらかじめ意味があるのだと思ひ込む——というのであれば、生物学的に同種の我々人間同士のコミュニケーションであっても、その間に存在する見えない壁は、実は Liku と Tanakil の間の種を越えたコミュニケーションの場合と、本質的にそう違いはないはずである。

この事情をまず明確化しようという Golding の狙いに沿って、コミュニケーションにおける意味の不確定性が、この少女らが異種の生物同士だという事情により、露わにされている。さらに、語りの視点が少女二人のどちらでもなく樹上の Lok にあることも重要である。二人の言語コミュニケーションが外側から観察されることで、自分が一定のコード規範に従っていると信ずる主体が内面から言語行為を眺めたときに意識されざるを得ない「意図」や「意味」はカッコに入れられ、いわばウィトゲンシュタイン的「言語ゲーム」、他者同士のあいだに起こる社会的な出来事という側面がせり出し

てくるのである。しかし一方で、ここで執拗に繰り返される彼女らの名前が記号そのものの生々しさを帯び、それが同時にこのテキストには珍しく平和で暖かな雰囲気を生み出しつつ交換される。したがって、あらかじめ相互に共有され確定した意味の体系など存在し得ない中、言語が実践の場で機能していることが印象付けられるのである。

突き詰めて見れば見えてくる越えがたい断層が、いかなるコミュニケーション主体同士の間にもある。Golding は二者の一方を我々とは異種の存在にすることによって、その断層を前景化した。にもかかわらず、その障壁を越えてコミュニケーションが成り立ってしまうというのが、この場面なのである。Liku と Tanakil という二人の子供たちは、真のコミュニケーションの成立の可能性、果てしない殺戮の連鎖から抜け出す可能性の一端を示してくれたように思える。こうしてこの場面は、このペシミスティックな——言語コミュニケーションに内在する危うさがその認識の根底にあることは疑いない——小説の中でほとんど唯一、読者に救いと希望を抱かせてくれるものとなっている。

### 3 翻訳と固有名

『後継者たち』という題名には聖書を下敷きにした皮肉<sup>11)</sup>に加えてまた別の二重性がある。つまり歴史上一度は栄えたネアンデルタール人の後を襲ったホモ・サピエンスと同時に、彼らの直接の子孫たる我々読者をも暗に指しているのである。ここからは、そのタイトルと同じように、これまで検討してきた場面に見られる、読者というもののまで含めたコミュニケーションの場の二重性に注目してみよう。そこに働いているのは、少女たちが呼び合う名前というものの、そしてこの作品の語りの、それぞれが持つ特異な性質の相互作用である。Tanakil と Liku というキャラクター間のコミュニケーションについては上で見た通りであるが、ここからメタ・レヴェルに一つ上って考えてみると、これは作者から読者へ伝達されている場面の一部でもある。

少女たちがお互いの名前を呼び合う場面をこの側面から考察してみると、*The Inheritors* の独特な視点と語りの様式が、先ほど「記号の生々しさ」と呼んだものをいかに伝えているかがわかるだろう。

題名の後に据えられたエピグラフは H. G. Wells の *The Outline of History* (1920) から取られている。醜く怪物じみたネアンデルタール人を描いたその一節はもちろん、この小説の主題の概括や象徴というより、皮肉の矢を射掛けるべき的である。このような言説を支える 19 世紀的な科学的合理主義こそが Golding の批判対象であり、公平・健全を装いつつも強権的なそれを疑うための武器が、ネアンデルタール人の感覚に寄り添うことなのだ。ただ、副作用としてどうしてもわかりにくさが伴う。写実的な言語表現をいくら重ねようが、記号は記号であり、情景という視覚情報そのもののミメシスにはなり得ないというのは、普通言うまでもない当たり前のことだが、このテキストでは特異な文体によりその当たり前が不自然に前景化されてしまっているとも言える。目の前にあるものが歪んだ眼鏡を通して見られているような間接性が、意識されざるを得ないのだ。しかし、以下に述べるような考え方に従えば、この間接性が、ある文学的效果を生み出すのにうまく利用されているとも言えるのである。

この小説の語り全体を覆う間接性が最もよく現れているのは、キャラクターたちの会話である。M. A. K. Halliday は語りの地の文がネアンデルタール人たち独特の知覚や現実認識を文体において表現していると論じたが、<sup>12)</sup> 彼らの会話文の構造の単純さや語彙の貧困も似たような機能を果たしている。両者とも英語の文章であるが、それぞれの背後に人間ならざる存在の感じ方、英語ならざる言語のありさまが存在することに思い至らねばならない。特に会話においては、あくまで原始人たちが喋っている元々の言語があって、その英訳が我々に届けられていると取らねばならない。ほとんど SF 的な設定ではあるが、あくまで描写はリアリスティックなこの作品を、当然ながら、擬人化されたネズミやアヒルが人間の言葉を喋るディズニー映画と同じように捉えるべきではない。擬人化は我々自身を対象へ投影することに過ぎない

ので、まったくの他者を創り出そうという Golding の意図が台無しになるからである。(ただし、そうやって喚起されるべき知覚や言語が、標準的な英語からの文体の乖離を手がかりにすればいかなるものだと推定され得るのかは——当然これが Halliday や Elizabeth Black<sup>13)</sup> といった文体論者の焦点であるが——我々の関心事ではないし、登場人物の名付け方に作者の隠された意図を見出すこと<sup>14)</sup>も、また別の話である。)

ネアンデルタール人はあくまでネアンデルタール語で喋っている。するとこの作品においては、直接話法による(引用符に囲まれた)キャラクターの発話でさえ翻訳を通して提示されざるを得ない。引用符内に表現された台詞はそのもともとの音声の(Rimmon-Kenan が指摘するように<sup>15)</sup>発話の持続時間や、あるいは声色、表情などの情報を欠いた不完全なものではあれ)忠実な再現記録であるとの常識的な前提は通用しない。(もちろん芸術的効果を狙った創作物である小説における会話は、現実の会話の書き起こしと同一視はできない。<sup>16)</sup>ここでは、小説における直接話法の会話は、人物の発話の、語り手による加工を施されない引用であると言う「約束事」を問題にしているわけである。)従って英語圏の読者であってもこの本を、翻訳小説を読むような態度で読むことになる。*The Inheritors* においてこの翻訳は、その存在をあまり気にしては作品全体を呑み下せない、薬を包むカプセルのようなものである。

それでいてなお、自分がそういう風に表現された語りに付き合っているのだという事実を頭におきながら読むと、次のようなことに気づく。つまり、作品全体を覆うこの翻訳のペールを貫いて、もともとの音そのものを(一般的な小説の会話文全般と同じように)響かせている唯一の言語要素が存在するのである。それが固有名である(もちろん興奮した時の叫び声なども音声の忠実な模写ではあろうが、ここで考えに入れる必要はない)。先ほど触れたような、普通の小説内に直接話法で表された会話と同様の制限はありつつも、*The Inheritors* においては固有名のみがもともと発せられた音声の直接的ミメシスであり得ることは、直観的に自明である。

固有名のみが元来の音を保っている。そう考えると、Liku と Tanakil のコミュニケーションの場面が新たな重要性を帯びてくように見える。というのもそれが、人間の言語とネアンデルタール人の言語というものの間に超え難く存在する壁を貫いて成立しているのみならず、そのメタ・レベルにおいては、我々読者とテキスト内世界の間に常在するはずの翻訳が支配しない形で伝達が行われているという、二重の特異点を現出させることになるからである。

この固有名の、Liku と Tanakil の場面で重要な役割を果たすミメティックな性質が、あらかじめ我々に対して提示されているように思える箇所がある。第4章で、病気の仲間の回復を祈って地母神的な神“Oa”に捧げ物をする時に、聖地の壁に Fa の発した Oa の名前が反響し、祈りの言葉は意味を失って、ただ“O”と“A”という音だけが響く(83)。ここで我々は、“Oa”が“O”と“A”という音素に分解されて響く様子を示されることによって、Oa という神の名は、後に Lok が現生人類たちにつける Chestnut-head とか Pine-tree といった、ネアンデルタール語の枠を超えるには翻訳を通過せねばならない換喩的な名前とはまったく別の、いわば本物の固有名であること、さらにその“Oa”という語の響きは言語の枠を越え、鼓膜を持つおよそすべてのものの耳に——いや本当は、聴覚など関係なくそこの石ころや葉っぱにでも——同じように響くということを示されているのである。

従って、Lok が耳にする現生人類のさまざまな言語の断片のうちで、固有名のみを直接話法の形で読者に提示することにも、十分正当性を持たせることが出来る。少女たちの発する“Liku”と“Tanakil”も、翻訳がすべてを覆うこのテキストの中で唯一、もともとの音声情報を保ったまま語り手が我々に伝えることを許された、この言語要素に属している。この小説の中で最も希望を感じさせる場面が我々にあのような直接的な描写で伝えられ得たのは、翻訳不可能なゆえに翻訳の壁を越えるという固有名というものの性質によるのである(この性質のよって来たところについては、次節で簡単に述べる)。

このように、ネアンデルタール人たちの発話のうちで唯一固有名のみが翻訳を超え、地の文から浮き上がって響いてくる。Liku、Tanakil と呼び合う二人の声は、それが固有名であるがゆえに、その場の出来事の表現として、テキストの中である種特権的な地位を占めている。Liku と Tanakil の間に成立したコミュニケーションが、その周囲の、何か一枚ベールを通して伝えられるような叙述にいわば裂け目を作り、その向こうの世界が事実そのものの直截性をもって迫ってくることが可能になっている。

*The Inheritors* の極めてつくり物くさいところは、この目的からすれば必然である。Golding は、我々人類の姿を外面から完全な異者として眺めてその性質を炙り出すべく、自らに厳しい文体的制限を課した。しかしこの場面ではその制限を逆手にとって、いわば闇の中にともった灯りが周囲の暗さ故にその光を増して見えるように、他者同士の真のコミュニケーションの可能性を突出させて示したと言えるだろう。

#### 4 固有名と希望のありか

現生人類は誘拐したネアンデルタール人の赤ん坊を生きたまま舟で連れて行くが、これを一つの希望の象徴と見ることが可能である。しかし、S. J. Boyd のような、ネアンデルタール人と人間の異種交配の結果人間性が温和なほうに改善される可能性に救いを見出すような読み<sup>17)</sup>は、誤っているばかりか危険でさえあるように思える。そもそも前作の *Lord of the Flies* (『蠅の王』) (1954) で Golding は、近未来の少年たちが野生に帰り、血で血を洗う抗争を繰り広げる姿を描き出したのではなかったか。次作 *The Inheritors* は逆に大昔の話であるが、当然前作の認識を受け継ぎつつ書かれているはずである。ではネアンデルタール人の血はいったいどこに行ったというのか? (最近では人類の進化史上実際にネアンデルタール人と我々の祖先との混血があったのだとする学説も出ているそうだが、そうであればなおのこと、Boyd の夢想は無効である。) テキストに没入していれば、もち



ろん、そのような希望を持ってしまうことはあり得る。しかしそれは、このテキスト全体が形成するアイロニーの前提である我々「後継者たち」の置かれた現実を、きれいさっぱり忘れてしまうことによって初めて可能になる類の錯覚に思える。またそれが危険だというのは、人間性が根本に解きたい矛盾を抱えているのならば、人間性自体の生物学的変改を通じて問題そのものを消去してしまえという、優生思想に繋がりがかねない思考だからである。

むしろ、同じある種の錯覚にもとづく希望ならば、前章での議論を踏まえて、我々の現実とテキスト内世界を結びつける以下のようなもののほうが、いくらかましではなからうか。

有名な固有名についての議論において、ソール・A・クリプキ (Saul A. Kripke) は、次のように述べている。まず、例えば「アリストテレス」という名前を選元的に分析するにあたって、「プラトンの下で学んだもっとも偉大な男」という記述の束で置き換えるのは一見妥当のように思える。しかしこの記述の束を、「アリストテレスがプラトンの下で学ばなかったことはあり得る」という真である命題の「アリストテレス」に代入すると、矛盾が起こってしまう。よってこの置き換えは成り立たない。このように固有名は、どんなに確定記述を連ねても、同定をすり抜けてしまう。それでは固有名の指示はどのように保たれているのか。クリプキは言う。

一つの理論としては、概略次のように言えるかもしれない。最初の「命名儀式 (baptism)」が起こる。ここでは、対象は直示によって命名してかまわないし、また名前の指示は記述によって固定してかまわない。名前が、「結節点から結節点へと受け渡される」時、名前の受け手は、私の考えでは、その名前を学ぶにあたって、それを伝えてくれた人と同じ指示でそれを使うことを意図せねばならない。<sup>18)</sup>

つまり、「アリストテレス」という固有名がアリストテレスを指示すると保証するのは、その名が実際に人から人へと、もとの指示を固定したまま受け渡されるという、歴史的な「因果連鎖 (causal chain)」なのである。ここ

で言われていることは、先ほど述べた、固有名を異なった言語の間で翻訳することが不可能であることの説明ともなっている。完全に分離された二つの共同体が（例えば二つの遠く離れた惑星上に）あったと仮定しよう。その場合でも、たまたま見た目から経歴から肉体の分子構造に至るまで完全に同じ性質を持つ、しかも同名の二個体が、それぞれに存在する可能性は理論的にゼロではない。しかし当然ながら、ある特定の場面で発された固有名が、（いくら音が同じであれ）その両方ともを同時に指すわけではない。<sup>19)</sup> 従って固有名は一般名詞の「雪」を“snow”というようには翻訳され得ず、元の指示を固定したまま共同体間で受け渡される可能性があるのみである。このことが我々の考察した場面で二人の少女の名前が共同体の壁を越えて響くことを正当化するし、その不自然さを回避するのに寄与しているとも言える。

ところで、前節でも用いた概念であるが、ナラトロジーでよく見られる語りの行為の図式化においては、テキストの伝達は、（作者が操る）「語り手」から「聞き手」への伝達（を読者がいわば観客席で聴いている）というモデルで説明される。<sup>20)</sup> さて我々はここで、*The Inheritors* を読んでいる間はこの仮構を現実のものとして扱い、さらに自身と「聞き手」を完全に同一視すると決めてみよう。すると、クリプキの議論を踏まえて言えば、今この場면을語られることによって、Liku と Tanakil という固有名の指示対象を固定する歴史的伝達の鎖に、我々読者が最後の環として加わったことになる。この鎖を時間軸に沿ってさかのぼるとどうなるか？ 我々に伝える前に、語り手はまた他の誰かから伝えられたに違いないし、その誰かはまた以前の誰かに、そして —— 伝達の鎖は何万年の時を越え、最初の名指しの場、幼い Liku と Tanakil がお互いの場面を呼び合うあの場面に達したところで、最初の環の誕生を見るのではないだろうか？

そうすると、先ほど述べたように、Liku と Tanakil が新しいコミュニケーションの場を生み出した場面をいわば生のままで伝えられた我々であったが、一方で、固有名というものが歴史的伝達の鎖を長々と後ろに引きずっているという性質上、実は我々自身が、語り手によって Liku と Tanakil と

いう固有名を伝えられた瞬間に、彼女らの生み出した新しい言語共同体の一員となったのである。ここにおいて、開かれた真のコミュニケーションが成立する可能性を我々に、我々自身の現実世界のものとして、感じさせるという効果が生じていると言えないだろうか。

もちろんこれはこの小説が Golding によるつくり物であることをすっかり忘れてしまわねば成り立たない理屈であるし、ロミオの手から毒薬の瓶を引たくろうと舞台によじ登る観客のような、虚構と現実をごっちゃにした錯誤だと言われたなら、私としてもまあそれはそうだと認めるにやぶさかでない。しかしこれは、先ほど錯覚とも言ったが、虚構の世界に没頭している時の経験、印象の話である。T・イーグルトン (Terry Eagleton) が、18 世紀に実在の書簡の集成という装いで現れ（つつもそれが虚構だという社会的了解も存在し）た Richardson の小説について述べているように、その起源に近い時代から、近代小説を読む読者の態度としては「あることを信じつつ同時に信じないことは現実に起こりうる」<sup>21)</sup> のであった。むろん、ロマン派を通過した現代の読者は 18 世紀ほどナイーブでないにせよ、虚構に対するこの心的態度がいまだ生きているのであれば、この場面で我々が、虚構と現実の壁を一時的に越え、小説の語りというコミュニケーション成立の場に直接参与する者として、ある種の感動を持ち得ると主張してよいように思われる。

さて、先述のように、自分たちの分捕り品として Tuami が眺めやるネアンデルタール人の赤ん坊が一つ、確かに希望の象徴となっている。我々の観点から言えば、彼女は再び、Tanakil にとっての Liku のように、誰かが人間のコミュニケーションについての本質的な洞察を得るきっかけになるかもしれない。しかしそれに劣らず示唆的なのは、先ほど少し触れた Tanakil のうわごと、“Liku!” (228, 232) である。これはまず、すでに彼女ら二人の交流を覗き見た我々に、人間の底知れぬ罪深さをまとって痛切に響く。しかした、Tanakil の母の言葉 “That is the devil's name. Only she may speak it.” (228) が示すように、“Liku” という言葉が今や Tanakil の属する言語共同体に導入された、そしてやがて、伝達の鎖の環をいくつも結びつ

つ、いつか —— いや現に今 —— 我々の元に届く、ということのしるしでもある。こうして、これが我々に伝えられたことは、我々自身があの第三の言語の場、その生起の可能性を内包した世界につながって生きているということの証左になる。そうするとこの表立っては悲痛な叫びを、ネアンデルタール人の赤ん坊と同様に、我々が他者との本質的なコミュニケーションに達し得るという潜在的な希望の象徴と受け取ることも可能ではないだろうか。もちろんそれは、テキスト内世界に厳然と存在する悲劇的不条理を何よりもまず我々自身の現実として受け止めつつ、の話でなければならないが。

## お わ り に

第3作 *Pincher Martin* (1956) で Golding は、自我に閉じ込められた孤独な人間の絶望的なあがきを、今度は内側から執拗に描いてみせた。箱に閉じ込められた蛆虫がお互いを喰らいあい、最後に巨大な一匹だけが残るというモチーフが、そういう人間 —— *The Inheritors* においては現生人類たち —— の住む社会の像である。そこで、この絶望的な状態から抜け出したいと言う願望が当然生じる。Golding の第4作 *Free Fall* (1959) において主人公 Sammy は、愛する Beatrice との究極の愛を夢想し、“I want you and your altar and your friends and your thoughts and your world... Help me. I have gone mad. Have mercy. I want to be you.” と述べる。<sup>22)</sup> 愛するものと完全に一つになりたいと言っているわけだが、仮にそれがどういう具合にか実現したとしても、その時には愛の対象たる他者が消失するわけなので、原理上愛は成り立たない。Sammy の願いは解決不可能なジレンマを抱えており、上の叫びは悲痛な調子を帯びる。

ここで「愛」を「コミュニケーション」と置き換えれば、Sammy の求めるのは *The Inheritors* における picture 的コミュニケーションである。つまり彼は、ネアンデルタール人になりたいと言っているのだ —— それが人間存在には不可能な望みであることを知りつつも。この絶対的不可能性を、そ

れが可能であるよう仮構された存在の側から照射し明るみに出すのが *The Inheritors* の試みであった。結果明らかなように、我々は個々ばらばらである——しかしこれは何も慨嘆すべきことではなく、それが我々人間というものだ、というだけのことだ。必要なのはだから慨嘆ではなく、正しく認識することである。そうした立場に立って、では個と個のコミュニケーションはどうあり得るのか、ということが、非常に限定的な形でではあるが、救いを予感させる希望とともに示されていたのである。

さて、この希望は実は、一つの暗黙の了解に基づいている。それはつまり、これが小説だということそれ自体である。三人称の語りで、語り手がキャラクターとして意識されない小説では特に、語り手の言明に疑いをさしはさまないのが約束事である。<sup>23)</sup> さもなければ、読むこと自体が不可能になってしまう。従って小説を読むことそのものが、語り手が超越的な視点を取り、自由に登場人物の内面に入り込み、彼らの思考や感情を報告することの、読者による承認となる。つまり、「他者の心」の存在をどう証明するのかといった存在論的な懷疑から派生する、「二者の間でコミュニケーションが成立していると、どうして分かるのか」という厄介な独我論的問い、コミュニケーション成立を超越的に保証してくれるような基盤の不在という問題を、小説はあらかじめ回避している。この点からすれば、James Gordin が“gimmick”と呼び<sup>24)</sup>寓話の首尾一貫性を損なうものとして非難した現生人類の方への視点転換も、それなりの存在理由を持っていると言える。Liku と Tanakil がお互いを呼び合う場面をその場で観察しているのは Lok だが、彼にはもちろん当の少女二人にとっても、両者のコミュニケーションが成り立ったかどうかは、相手の心の中を覗けない以上、究極的には分かり得ない。しかし、小説の最後の二章で、現生人類の視点に戻ることを許されることによって、読者だけは、少女二人のコミュニケーションがやはり成立していたのだということを、動かぬ事実として知ることができる。

先ほど述べたように、テキスト内に Liku と Tanakil の間のコミュニケーション成立の保証となる意味の確定性は存在しないが、テキスト外に立ち、

語り手と特権的な視点を共有する読者からすれば、それは当然存在するのである。こうして上から見下ろす読者の眼前で、あくまでそのことを知らない Liku と Tanakil が、それでもなお、相手がコミュニケーションの通じる存在であろうという信念を抱き、そしてその信念がたまたま現実と合致し（もちろんこの「たまたま」の幸運も読者と作者のレヴェルからすれば必然として設定されていたわけであるが）見事にコミュニケーションが成功したことが、あまねき悲慘の中に小さな感動を呼ぶわけである。文体論的分析が示すような一種の言語的離れ業によって Golding がネアンデルタール人の感覚や世界観を構築することは、それ自体が詩的・美学的目的であるというよりも、どうかして我々と全く違う、他なる存在を、相応のリアリティとともに提示しなければ、完全な他者の間のコミュニケーションを現出させるという課題を達成し得ないという事情から取られた、必然的戦略だったと見なければならぬ。この完全な他者同士というどこまでも不確定な相対性と、逆に超越的な確定性としての小説の約束事が、*The Inheritors* というテキストを二重に覆っている。

あるエッセイの中で、Golding は自らを以下のように定義している。

I will use cosmos to mean what Tennyson meant with all in all and all in all—the totality, God and man and everything else that is in every state and level of being. Universe I will use for the universe we know through our eyes, at the telescope and microscope or open for daily use. Universe I use for what Bridges called ‘God’s Orrery.’ With that distinction in mind I would call myself a universal pessimist but a cosmic optimist.<sup>25)</sup>

ここで言われる universe は我々が直接その中に生きていると了解している世界であり、単純で感覚的な事実に過ぎない。そこに生きる者の認識はその内で完結し、外部（God）は見えないが、それでいて生を絶対的に意味づけるものが求められ、結局我々の住む Orrery（太陽系儀）の外にまします絶

対者という、静的で安定した観念が打ち立てられる。これに対して cosmos は God を含むすべてを包含し、universe よりさらに大きい——が別に文字通り広いわけではなく、外部と思われているものも含めてすべてが我々の世界内に存在するはずだという態度で見られたときに見えてくるべき世界である。周囲を仔細に観察・分析すれば発見できるというわけではなく、そもその見方を変更した時に初めて見出されるものだ。

さて、構造的アナロジーによって、この両概念を小説のテキスト伝達に当てはめることが可能であろう。つまり、小説家の仕事を一つの世界 (universe) の創造だと考えると、その世界は内部からは不可視な外部を持っている。つまりその世界を創造する作者、読む読者というメタ・レベルである。よってテキスト世界内部とともに、その外側の作者と読者を含めた全体を考えるのが cosmic な態度ということになる。すると、アナロジーを逆向きに送り返すことによって、我々の現実世界でもコミュニケーションが成り立つというのが確からしく思われてくる。実際それが Liku と Tanakil の場面に際して我々の持つ希望である。しかし忘れてはいけないのは、この理屈では、現実世界の外部、そのまた外部……と、外部 (超越) を無限に求め続け得るということだ。外部が無限に続くということは、外部など存在しない——“all in all and all in all”—— ことと同じである。そんな堂々巡りを孕みつつ全体として在る世界 (cosmos) で、あくまでコミュニケーションを肯定することは、論証ではなく、ひとつの祈りである。そしてこの祈りは、自らに誠実であろうと欲するならば、一瞬だけ眩かれ、その刹那に消え去るほかない。例の場面の短さ、さりげなさは、ここに大きな理由があるように思われる。

これまで見てきたように、*The Inheritors* の少女二人の運命は彼女らの universe のレベルで言えば悲劇以外の何物でもない。一人は殺され、一人は発狂する。これを目の当たりにして、我々はまず慄然としなければならない。しかしその不条理を凝視しつつその上のレベルで考えてみれば、我々がそうしたように、どうしようもない悲劇の中にある希望の契機を見出

すことができる。まず一方で、Golding は我々の生を神を沈黙の観客とした悲劇だと考えているペシリストであろう。我々の記号コミュニケーションはいつまでも絶対性を欠いた無根拠なものに留まらざるを得ない、そのことを我々は常に認識しておかねばならないというのが、彼の一つの警告である。しかし同時に彼は、それをまったく悲劇とはとらえない別の態度があり得ると信じており、その限りで自分はオプティミストなのだと言っているように思える。我々の検討してきたように、辛辣な懷疑の内に一瞬コミュニケーションを肯定して見せる *The Inheritors* というテキストは、その二重の信念の表白とも読める。そしてそれはもちろん、小説という形でなされねばならなかったのである。

#### 註

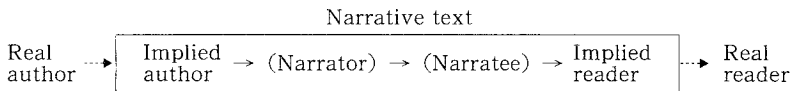
- 1) William Golding, *The Inheritors* (London: Faber and Faber, 1961). 以下、作品からの引用はこのペーパーバック版に拠り、頁数は本文中の括弧内に示す。
- 2) ロマーン・ヤーコブソン (川本茂雄監修、田村すゞ子ほか共訳) 『一般言語学』(みすず書房、1973 年) 188 ページ参照。また、以下にあるような図式である。Geoffrey N. Leech and Michael H. Short, *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*, English Language Series 13 (London: Longman, 1981), 121.
- 3) ただし、語彙に乏しいネアンデルタール人が、picture という語を単なる考えとかイメージという意味で使うこともある。
- 4) Virginia Tiger, *William Golding: The Unmoved Target* (London: Marion Boyars, 2003) 71.
- 5) 知的に優れた Fa は栽培農業 (49) や灌漑 (63) を思いつくが、周囲にまったく理解されない。
- 6) 部族の一員 Ha の失踪 (おそらくは現生人類に殺害された) に関する Lok の無茶苦茶な推測 (71) が、端的に picture の破綻を示している。
- 7) テキストの初めの方で Lok が未知の動物 (現生人類) の残した臭いを辿りつつその対象になりきった時、自らの属する共同体から決定的に切り離されたという感覚を覚える (78)。この時彼は、現生人類の孤立性という本質に触れたのだと言える。同様に、彼が自らを “inside-Lok” と “outside-Lok” に分裂したように感じ始めるのは、現生人類の技術と創造性に憧憬し彼らを模倣する Lok の「人間」化、つまり自然からの分離と内面への後退が進行しつつあることを示している。幼児が自らの鏡像を「自己」と認識することで自我の形成と自他の区別へと踏み出すというラカンの「鏡像段階」をそのまま劇化したようでさえある、Lok



- が川面に自分の顔が映るのを見て「Lok を体験」する場面（107-108）もまた、Lok が自然との統一から疎外される「人間化」のさらなる進行を描いている。
- 8) Mark Kinkead-Weekes and Ian Gregor, *William Golding: A Critical Study*, 3<sup>rd</sup> ed. (London: Faber and Faber, 2002) 91.
  - 9) この小説はしたがって、エデンの園からの人間の墮落を模した寓話と解釈されがちである。物語中の瀆 (the fall) は創世記における人類の墮落 (the Fall) を象徴するとか、Lok と Fa が隠れて人間たちを見守る木が善悪の知識の木 (創世記 2: 9) だという議論が一般的である。L. L. Dickson, *The Modern Allegories of William Golding* (Florida: University of South Florida Press, 1990) 31 を参照。失われた丸木橋を善悪の知識の木の象徴とみなすのは Arnold Johnston, *Of Earth and Darkness: The Novels of William Golding* (Columbia: University of Missouri P, 1980) 27 であるが、現生人類の操る丸太をそう見なす James Gordin, *William Golding* (London: Macmillan, 1988) 36 のような論もある。私としてはこのテキストの中心にバベルの塔の神話を読み取るべきだと思う。ただ、神話的寓意がこの物語に埋め込まれているのは間違いないとしても、テキストを象徴の図式的配置に還元することには慎重であるべきだろう。人間の原罪を象徴するエデンからの追放を、小説家が今度はネアンデルタール人の絶滅に象徴させるなどというのは、意匠変えしか意図にないならばあまり有意義とも思えないが、解釈がその道を逆に辿ることもまたしかりであろう。
  - 10) マルティン・ブーバー (田口義弘訳) 『我と汝・対話』(みすず書房、1978 年) 参照。
  - 11) Kinkead-Weekes and Gregor が指摘しているように (*William Golding: A Critical Study* 50)、欽定訳聖書では “the meek shall inherit the earth” (Ps. 37: 11) とある一方で、この小説で世界を継承するのは “the meek” を殺戮した者たちである。
  - 12) M. A. K. Halliday, “Linguistic Function and Literary Style: An Inquiry into the Language of William Golding’s *The Inheritors*,” *Literary Style: A Symposium*, ed. Seymour Chatman (London: Oxford University Press, 1971) 330-68. Halliday はこの論文で、ネアンデルタール人の行為を表す文に自動詞が主に使われることや、無生物が主語になる文の多さを指摘し、それら文法的特徴がネアンデルタール人の、自然に操作を加えながらない性質や無生物と生物を区別しない世界認識の表現になっていると論じている。
  - 13) Elizabeth Black, “Metaphor, Simile and Cognition in Golding’s *The Inheritors*,” *Language and Literature* 2 (1993) 37-48.
  - 14) 例えば Dickson (*The Modern Allegories of William Golding*, 30) は、Liku という名前は “like you” を示し、Tanakil には “kill” が埋め込まれ、Fa は “fall” を示唆するといった指摘を行っているが、我々の関心からは外れる。ただし、Golding が “like” と “kill” の意味というよりもタイポグラフィカルな対称性を意識しつつ、二人の少女を鏡映しのように向かい合わせたと考えるのは、意味のないことではないだろう。
  - 15) Shlomith Rimmon-Kenan, *Narrative Fiction: Contemporary Poetics*, 2<sup>nd</sup> ed.

(London: Routledge, 2002) 109.

- 16) Norman Page, *Speech in the English Novel*, 2<sup>nd</sup> ed. (Atlantic Highlands, NJ: Humanities Press International, 1988) 7.
- 17) S. J. Boyd, *The Novels of William Golding*, 2<sup>nd</sup> ed. (New York: Harvester Wheatsheaf, 1990) 45.
- 18) ソール・A・クリプキ (八木沢敬・野家啓一訳) 『名指しと必然性』 (産業図書、1985年) 115 ページ参照。ここで「結節点」と訳されている語は原文では“link”であり、鎖の環が含意されている。Saul A. Kripke, *Naming and Necessity*. (Cambridge: Harvard University Press, 1980) 96 参照。
- 19) Hilary Putnam, “Meaning and Reference,” *The Philosophy of Language*, 4<sup>th</sup> ed. (New York: Oxford University Press, 2001) 288 – 95.
- 20) Seymour Chatman, *Story and Discourse: Narrative Structure in Fiction and Film* (Ithaca: Cornell University Press, 1978) 151. 以下のような図式である。



- 21) T. イーグルトン (大橋洋一訳) 『クラリッサの凌辱』 (岩波書店、1987年) 31 ページ参照。イギリス近代小説の「起源」により近い Defoe の *Robinson Crusoe* (1719) は、初めノンフィクション (実在する人物の手記) として出版された。約 20 年後の Richardson の *Pamela* (1740 – 41) までは、小説読者のほうにも虚実のあわいを楽しむ態度がいくらか身に付いていたのではなかろうか。
- 22) William Golding, *Free Fall* (London: Faber and Faber, 1961) 84. 省略は筆者による。
- 23) Michael Toolan, *Narrative: A Critical Linguistic Introduction*, 2<sup>nd</sup> ed. (London: Routledge, 2001) 3.
- 24) James Gordin, *Postwar British Fiction* (Berkeley: University of California Press, 1963) 199.
- 25) William Golding, “Belief and Creativity,” *A Moving Target* (London: Faber and Faber, 1982) 201. 強調は Golding による。